
ISに生まれた奇策士

暇人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISに生まれた奇策士

【Nコード】

N1832Y

【作者名】

暇人

【あらすじ】

IS世界に転生した主人公。特典でかなりのチートを手に入れるものの、代償が…！？この物語は、ご都合主義・キャラ崩壊・原作崩壊などが含まれます。それでもバツチ来いという方はどうぞ。ちなみに作者は受験生のため、更新は亀より遅いです。

第1話（前書き）

またまたやってしまった…

まだまだ駄文です。それでもよろしければどうぞ。

1 / 13 内容を修正しました。

第1話

「すみませんでしたッ!!」

「はい？」

え、ちょっと待ってください？何が何だかわからないのですが？どうして幼女が目の前で泣きながら土下座しているのですか？状況の説明を要求します。

「え、ええとですね、実は…」

あらかじめ説明されましたが、私は死んだのですね…

本屋で好きな本を買い込んで、家まで帰る途中に引かれそうになる子供を発見。

何とか近くにいた人に投げ渡すことに成功。

でも自分が間に合わず、思いつきり跳ね飛ばされたと…

で、それが実は目の前の幼女のせいで、お詫びに漫画やアニメの世界に転生できると。しかもチート性能付きで。

うわゝ、思いつきりテンプレ通りですね。

「で？転生先はどこになるんですか？」

もらえるものはもらっとく主義です。別に転生できなくてもいいのですかね。

「えっと……インフィニット・ストラトス ISの世界ですね」

ふむ、そのタイトルは聞いたことがあります。しかし内容を知りませんね。

「具体的にはどんなところですか？」

「女尊男卑の世界ですね」

女尊男卑ですか…ま、別に大丈夫でしょう。

「能力はどのようなんですか？」

「あ、ちょっと待っていてくださいね…」

む？突然どうしたのでしょうか、カードなんか持ち出して。

「この中から四枚好きなものを選んでください」

ああ、これも運なんですね。では、昔手相でくじ運がいいと言われた左手で…

「これとこれとこれ…あとこれですかね」

えーと、何々？

……………すさまじい物が出てきました。ていうかこれもはや四つの域ではないでしょう。

「どうしたんですか？」

とりあえず黙って引いた物を見せます。

「どれどれ…うわぁ」

あ、そっちもここまでとは思わなかったんですね。しかしこれは…

え、引いたものですか？『刀語のあらゆる技や能力』『悪刀「鏢」』『曲弦師』『音使い』です。

こんなもの引いたら転生しても平凡には暮らせそつにないですね…

「あの、すみません…」

「はい？どうしました？」

「あのですね、あまりに強すぎる物を引いた場合は多少制限というか、マイナス面も行けないといけないんですよ…」

「制限ですか？たとえばどのような…」

「ええと、視力を限界まで落としたりだとか、そういったものですね」

「まあ、これでは確かに制限をかけるべきでしょう。というより、こんなに能力をもらったところで使うかどうかわかりませんし…」

「では、今度はこのカードの中から1枚引いてください」

では、今度は右手で…

「これにしましょう」

どれ、果たしてどのような…っ!？

……やばいです。果てしなくやばいです。いったいどうしましょう。

「どれどれ…あなた、くじ運いいのか悪いのかわかりませんね…」

全くです。手が違うだけでどうして『鑢七実の病魔全部』なんて代物が引けるのでしょうか。

確か1億個でしたっけ？悪刀があるから多少は大丈夫でしょうが…

「さて、それではそろそろ転生させますが、ほかに何かやっておくことはありますか？」

死ぬ前は家族もいなくて一人でしたし…

「特にはないですかね」

「それでは送ります！あ、さすがに性別とか能力以外の事に関してはランダムですのであしからず」

え、ちょ、それって女になることもあるって事ですか！？

「そんなのもっと早く言って「それでは行ってらっしゃい！」無視ですか！？」

私はそこで意識を失いました。

どうも、みなさん。とがめです。あ、とがめっていうのは転生してからの名前ですよ？

どう頑張っても見た目が刀語のと。めっというのもあるんですけど。

あ、性別は女でした。もはや生まれて7年たっているのであきらめました。が、もしもう1度あの私を転生させた少女と会うようなら1発ぶん殴ってやろうと決めてます。

まあ、前世の性別だの名前だのといった記憶は忘れてしまっている。ので割と早く慣れましたが。

ちなみに現在一人です。家なしです。ホームレスです。

親は5歳の時に金を少しだけ残して蒸発しました。ちなみに額は1万です。これでどう生活しろと？

多分この病魔が怖かったんでしょうね。

これ、うつることはありませんが、それでも不気味ですし、医者にも『死なないのが不思議』などといわれてしまいましたしね。

現在能力関係に関しては使いこなせるようになっていきます。

音使いによる認識障害をかけながら繁華街を歩き、ある程度お金が貯まるまで来る人来る人からスリつけます。これで結構お金が貯まりました。

悪刀はまだ使っていません。あれは戦闘などにならない限り使うことがないので、使わないことを祈ります。

親と住んでいた家は追い出されてしまったので、仕方なく公園に住んでいます。基本はベンチですね。

後はその周辺にプレハブですが家を建てました。見稽古をまさかこんなところで初めて使うとは思いませんでした。ちなみに防犯は曲絃師を使っています。仕掛けた鋼系に一本でも引っ掛かった

らトラップ作動。これで今まで他の人の侵入を許したことはありません。意外と自慢だったりします。

でも大切なものなどは基本腹の中に収納しています。スペースとらなくて便利です。

で、今現在の私の状況。

何やら嫌な笑みを浮かべた男どもがこっちににじり寄ってきています。

「おい嬢ちゃん、今一人か？」

「ええ、そうですが？だからどうしたというのです？」

「いや、俺たちといい事しねえか？」

「お断りします。警察に突き出しますよ？」

「ハハッ、威勢のいい嬢ちゃんだ。だがそれもいつまで持つかね？」

面倒くさいですね。心身掌握でも使いましょうか？

「おい貴様ら、なにをやっている」

ん？誰でしょうか？女の人のようですが。

「んだよ、俺たちがこれからいいことしようって時に……」

「ほう、その『いいこと』とやらをぜひとも教えていただきたいと

ころだな」

「アぁ？…おお、あんたなかなかの美人じゃねえか。あんたがやるか？」

この男、ロリコンではなかったのでしょうか。守備範囲がいささか広すぎる気がします…

「残念ながらお断りだ。他を当たるんだな。今すぐ警察を呼んでやるるか？」

何やら女の人が携帯を取り出しました。画面には110の数字。なるほど、これなら手が出せませんね。

「ちつ、仕方ねえ。てめえら、帰るぞ」

やっと帰りましたか。まあ、帰らなかった場合は糸で拘束、音で二度と手出ししてこないようにしようと思ったのですが…

「おい君、大丈夫か？」

「ええ、大丈夫です。ご迷惑をおかけいたしました」

「ちなみに君、親は？この近くにいますか？」

「親はいませんよ？今はこの公園で一人暮らしです」

＼side out＼

＼side 千冬＼

たまたま通りがかった公園で絡まれている少女を助けたところ、なんとこの子には親がいないという。

しかも家が公園？どういうことだ？

「どうして？親戚はいないのか？」

「そちらも知りません。気が付いた時には両親はいませんでした。おそらく捨てたのでしょね」

この子も親に捨てられたのか…

私、織斑千冬は弟である織斑一夏とともに両親に捨てられた。だからなのか、目の前のどこか儚げな少女に気が付けばこんなことを口走っていた。

「家に来ないか？」

「突然どうしたのですか？普通に考えたらそんなことは言い出しませんよ？」

「わかってる。実はうちにも親がいないんだ」

「それがどう関係してくるのですか？」

「私は弟がいるんだがな、その弟を養うために忙しくてかまってやれてないんだ」

「なるほど、要は面倒見てくれると助かるとか言っただころでしょうか？」

「それもあるんだが…」

「が？」

「一番は君をこのまま放って置きたくなくなてな。またさつきみたいなことがあつた時に私やほかの人がいるとは限らない」

「ふむ……」

少女は考え込んでしまった。それもそうだろう、突然知らない人からこんな誘いをかけられているのだから。

＼side out＼

＼とがめside＼

どうしましょう。突然家族にならないかと誘われました。これで受けたところで私の異常性からまた捨てられる可能性はあります。

しかし、受けることでいろいろな面で楽なことはありますし…

「……わかりました」

「…！ああ、これからよろしくな。私の名前は織斑千冬だ。ちなみに君の名前は？」

「とがめです。苗字はありません」

「ではとがめ、家に帰るぞ」

「はい、姉さん」

こうして私は織斑家で暮らすことになりました。

第1話（後書き）

いかがでしたか？よろしければ感想・誤字報告などをお待ちしております。罵倒のみなど悪質なものは即刻削除いたしますのでご了承ください。

なんか今まで書いてきた中で一番すらすらかけた気がする…

第2話（前書き）

相変わらずの駄文です。それでもよろしければどうぞ。

初戦闘。やはり俺に戦闘描写は無理なのか…？

第2話

どうも、このたび正式に織斑家次女となりました織斑とがめです。姉さんに拾われてから数ヶ月が経過しました。え？飛ばし過ぎだつて？わかりません、何の事ですか？

拾われてからしばらくは大変でしたね。なんせ私は病弱ですから、いかにも弱って見えたのでしょう。これが常だからと納得してもらうまで結構時間がかかってしまいました。まあ、平熱が40度近くて普通なんて言ったら信じられないのもわかります。相変わらず何かあると一夏か姉さんが吹っ飛んできますが。過保護です。

あ、一夏っていうのは姉さんの言っていた弟さんの名前です。聞いたところ同い年でしたが、私の方が誕生日は私の方が先だったのが姉です。どうやら対外的には私は一夏の双子の姉で、体が弱くて今まで療養していて学校にいけなかったということにするそうですよ。まあ、通い始めた学校も保健室登校だからほとんど知り合いもできないんですけど。

双子ってのにも無理があると思うんですけどね？何しろ髪の色から顔つきから何から何まで私たちは似ていませんから。

姉さんや一夏の友達にあたる篠ノ乃姉妹の方々にも会いましたが、姉の束さんがくつついてきてしっこかったですね。おそらく私の色々と規格外な部分にでも気づいたのでしょう。話を聞く限り天才の類のようでしたし。自分でいうのもなんですが私も天才ですからねどこか通じる部分でもあったのでしょうか。

妹の筈は何やら気の強そうな子でした。が、一夏の行動や発言で百面相してましたから、おそらく一夏の事が好きなんだろうと思いま

す。見ていてなんだかほほえましかったです。私は応援しますよ？

さて、ここらで回想は終わらせましょう。実は現在、非常事態が発生しています。

何と、日本に向けてミサイルが放たれているらしいです。それも約2500発。

どうやら何者かが軍のパソコンにハッキングして発射したようですが、面倒なことをしてくれましたね。あんなチートをもらっても使わないことを願っていたのですが、どうやら使わねばならないようです。

現在の位置は海岸。すでに腹には悪刀「鏢」を差し込み、少々無茶がきく状態です。

にしても、この世界にもワンプ。スってあつたんですね。私自身は遠距離がそこまで得意ではないので、遠距離技をいろいろと見取らせてもらいました。その中でも特に鍛え上げたのがコレ。なかなか強くなりました。

まず、骨肉細工で腕を魚人の物に強化。そして、手から水を垂らし、それを思いっきり投げ飛ばす。

「うちみず
撃水」

ちなみに見とつたのはアーロンの物ですが、もはや私のこれは鉄すら貫通します。あんなへなちょこではありません。ひとまずこれを両手で行いひたすらにミサイルを撃ち落とします。便利なんですよ、弾切れというものが存在しませんし、射程もなかなかですし。

とりあえず私たちの町に向けて打ち込まれた物は全て撃ち落としたはずです。さて、さっさと退却しますか。

今、私は海岸にてこの前のミサイル撃墜時（どうやらあれは白騎士事件と呼ばれているようですね）に私が落とした物以外のミサイルを撃墜し、さらに攻めてきた他国の軍隊を殺さず無力化したロボ、通称白騎士と対峙しています。搭乗者は姉さん。

なぜこんなことになっているかというところ…

ええ、ばれたんですよ。私の能力やらなんやら。

まさか衛星で確認されているとは思いませんでした。で、それを見ていたらしい束さんに、

「対I Sで戦闘してみて」

などといわれて仕方なくやることになりました。あ、ISっていうのは白騎士の正式名称の略らしいです。

略さず言えば「インフィニット・ストラトス」っていうそうです。ちなみに開発者は束さんらしいですよ？

ばれたのなら仕方ありません。もうやけです。やってやります。殺さない程度には全力出しますよ。

「ホントに良かったの？」

「何がです？」

「だって、めーちゃんシールドも絶対防御も何もないんでしょ？」

あ、めーちゃんっていうのは束さんが私に勝手につけたあだ名です。

「ええ、ありませんよ、そんなものは。あ、でも今から私のやることには何も言わないでくださいね？」

「うん、分かった」

さて、まずは悪刀を取り出して…

「…本当にお腹に入ってたんだね」

なんか言っていますが無視します。後は腹にこいつをさして、と。あ、悪刀について説明するの忘れしました。

「な！？何やってるんだとがめ！？」

「うるさいです、黙っててください姉さん」

姉さんの武器は刀一本だそうです。ならばこちらも刀で行きましょう。ま、刀といっても自分の事、つまりは虚刀流ですが。

「準備OKです」

「よし、それじゃ始めるよー！よい…」

構えは虚刀流七の構え・杜若。でもこれ、見た感じはクラウチングスタートなんですよね。

「始め！」

姉さんはまだ武装を展開していません。おそらく私が攻撃する前に反応できると思っているのでしょうか。

「遅いです!!」

この七の構え・杜若の特性である「ごく僅かな時間での最高速度への到達」を活かし、一気に姉さんとの距離を詰めます。そして次に繰り出すは…

「虚刀流・薔薇！」

スピードと体重を乗せたとび蹴りをかまします。しかしそこはさすが姉さん。とつさに横へ避けましたか。すさまじい反応速度です。それとも乗っている機体の性能がいいんですかね？

お、やっと武器を取り出しましたか。しかし、刀が相手ですか。いいですね、実戦経験積めますよ。

「ハアッ！」

上段から斬りかかってきた姉さんの刀の腹を殴って横へそらし、そのまま虚刀流・牡丹、まあ体重を乗せた回し蹴りを叩き込みます。さらに吹っ飛びそうになった姉さんの機体をワイヤーで拘束。ついでに手首に巻いたワイヤーをきつく締め、刀を手放させます。さらに…

「虚刀流・木蓮」

ただのとび膝蹴りですが、これでさらに追撃をかけます。さて、姉さんは…

「ぐ、うおおおー!!」

おお、抵抗がすさまじいですね。ワイヤーはかなり頑丈なのを使っているんですが、すぐに切れてしまいそうですよ。なら、最近やっとな手加減が効くようになったあの技を使ってさっさと決めてしまおうとしますか。

「虚刀流最終奥義・七花八裂（改）!!」

さすが最終奥義。姉さんの機体が完全に沈黙しました。

戦闘後、そういえば話していなかった私の流派や、悪刀について詳

しく説明させられました。そのうえで私の病魔の数も話しましたが、姉さんに泣かれました。泣き止んだ後、「お前のそれは本当に治らないのか？」とか聞かれたり、束さんに治療法がないか聞いたりしていました。が、私は治らないとしか言えませんし、束さんも病気は専門外らしくわからないそうです。

ちなみに二人には他言無用でお願いしました。これに関してはうかつに話したりすると即化け物扱いですからね。

姉さんの過保護具合が悪化しました。私が生きてきたり、学校に行こうとすると「大丈夫か？」と毎度のように聞いてきます。何やらそれに感化されたのか一夏も私の世話をよく焼くようになりました。姉さんは家事が壊滅的なのに対し、一夏は小学生ではありえない家事スキルの持ち主ですので大助かりです。最近の私の好物は一夏の作るおかゆです。絶品なんですよ、あれ。

え？ブラコン？…撃水でぶち抜きたいんですか？

第2話（後書き）

いかがでしたか？よろしければ感想・誤字報告などをお待ちしております。罵倒のみなど悪質なものは即刻削除いたしますのでご了承ください。

本当に誰か戦闘描写のコツ教えてくれませんかね…

第3話（前書き）

相変わらずの駄文です。それでもよろしければどうぞ。

第3話

どうも、織斑とがめです。

既に中学1年生となりました。あれからいろいろありましたね。ISが女性しか使えないことが発覚して女尊男卑の世の中になったり、束さんがISの製造をやめて行方をくらませたり、篝ちゃんたち篠ノ乃一家が政府の意向で引っ越ししたり。篝ちゃんは泣いてました。おそらく一夏と別れるのが嫌だったのでしょう。なんか最後に一夏が「また会えるって！」とか再開フラグ立ててましたから大丈夫でしょう。

後は、小学6年生の時になんか『第1回モンド・グロツソ』とかいうISの世界大会で姉さんが優勝したぐらいですね。何やら最初一夏に教えるつもりは無かったようでしたが、私が一応見稽古で他の国の代表の技も含めて盗みまくってたら一夏に見つかりまして、結局教えることになりました。まあ、姉さんは一夏がISに関わる事にあまりいい顔をしませんし、仕方ありません。過保護っちゃ過保護ですが。

私ですか？相変わらずですよ。せいぜい変わったことといえば姉さんが私がIS関連に触れても何も言わなくなっただけ程度ですかね。まあ、下手をすれば私はモルモットになりかねませんから。何しろこれだけの病魔にかかっていまだ死なないのですからね。

学校は相変わらずの保健室登校です。あ、ここも1つ変わりましたね。一夏が昼休みとかに遊びに来るようになったんですよ。中学校に入ってから友達二人をよく連れてくるようになりました。確か五反田弾と鳳鈴音ごたんだん ファン・リンインでしたっけ？二人とも一夏に双子の姉がいるとは

知っていたようですが、私を見てビックリしましたね。前にも言いましたが、私と一夏はまるで似ていません。ついでに言くと姉さんとも共通点がほとんどないです。そんな私ですから、驚くのも無理はないと思いますけどね。

で、現在。

私は『第2回モンド・グロツソ』の会場に來ています。どうして基本修業と学校以外はあまり外出しない私がいるかといいますとね…

「お前ら、私はこれからしばらく外国に行ってくる」

「どうしたのですか突然？」

一夏はびっくりしていませんが。まあ、昔から姉さんはよく出かけますからね。

「いや、今度の『第2回モンド・グロツソ』に日本代表として出る
ことになってな」

あ、姉さんが一夏に教えているのは直接言わない場合は私から一夏に教えてしまうことが分かっているからです。

「おお、おめでとうございます姉さん」

「おめでとう千冬姉！あ、そうだ！なら俺も応援に行く！」

「なっ…ダメだ、テレビで我慢しろ」

「嫌だ！」

「ダメだ！」

とかいう押し問答というか、兄妹喧嘩が繰り広げられて、結局姉さんが折れました。

で、何やら「誰もいないときにとがめ姉が倒れたら大変だ」とか一夏が言い出しまして、私も一緒に行くことになった次第です。あ、一夏は基本的に私の事を呼ぶときは『とがめ姉』です。にしても過保護ですね、さすがに倒れはしませんよ？まあ、間近で姉さんの応援ができるのはうれしいんですが…

なんか…こう、嫌な予感とかそんな感じの物がするんですよね…

何もなければいいのですが…

ええ、私がつかつでしたよ。まさかトイレに行っている間に一夏が誘拐されるとは思ってもみませんでした。くそ、当たって欲しくない予感が当たってくれましたね…！もう少しで姉さんの決勝だというのに！

ひとまず姉さんに連絡です。携帯で、姉さんの番号に連絡します。

「どうした、とがめ？」

「緊急事態です姉さん。一夏が誘拐されました」

「なっ！お前は！？お前は無事なんだな！？」

「だからこうして連絡してきているのでしょうか？で、ひとまず姉さんは伝手でもなんでも使って一夏の居場所を探し出してください。私もやれるだけの事はします」

「ダメだ、お前はそこにい「嫌です」！！」

「一夏は確かに姉さんの弟です。でも、私の弟でもあるんです。弟の危機に動かない姉がどこにいるというんですか？では、こうしている時間も惜しいので切らせてもらいます」

「ま、ま「それでは」」

姉さんは何を馬鹿なことを言っていたのでしょうか？ああ、私が病弱だから何もできないとも思ってた…いるはずがありませんね。姉さんは私の力を知っていますし。まだまだ過保護ということでしょうか。

さて、一夏という私の逆鱗の1枚に触れたのです。それ相應の仕返しはさせてもらいますよ？

まずは忍法記憶巡りを発動。私は基本的に修業は欠かしませんでしたので、今ではすべての能力や技において本家より強くなってます。これもその一つです。

私はこれらの記録が読み取れる対象が『無生物』であることに着目しました。『無生物』であるという縛りだけならば、いくらでも拡大解釈はできます。で、私思っただけですよ。

『範囲はどこまで広げられるのか』

って。だって、生き物でなければいいのでしょうか？だったら地面とかからも読み取れるはずですよ。で、いろいろと試しました。結果としては…

成功しちゃいました。

いえ、さすがに1キロとかそこまでの広範囲は無理がありますよ？
500メートル越えもきついんです。しかし、1メートル〜100メートルの間はかなりいけることがわかりました。そこを越えるとき
つくなってくるのですが、どうやらこれは単純に情報量が多いから
みたいですね。

今回読み取る範囲は一夏の座っていた席から半径100メートルの
床。

ふむ…さらわれたところまでしか記録がありませんね。せいぜいど
つちの方向に移動したかですか。ならば…

一夏が連れ去られたと思しき方向に100程進みます。そして再び
発動。これを繰り返し…『プルルル！』誰ですかこんな時に電話し
てくるのは…姉さん？

「もしもし？どうしましたか？」

「一夏の居場所が分かった」

「本当ですか！？どこです？」

ならばさっさと聞き出して私が向かうとしましょう。姉さんは試合
が、それも決勝戦があります。

「一夏が連れ去られたのは『————』という町の倉庫らしい」

「わかりました。ではお先に向かわせてもらいます」

「ま、待て！お前はここに」「では」「

まだそんなことをほざきますか。私にも我慢の限界というものはあります。ただ、基本的にそこまでいかないだけです。

さて、誘拐犯のみなさん、逆鱗に触れたということに今のイライラをプラスしますよ。覚悟しておいてくださいね？

「さて、ここですか…」

現在私は姉さんが言っていた倉庫の前に来ています。まだ姉さんが来ている様子がないのは、いろいろと手間取っているのでしょうか。

他の倉庫の陰に隠れて様子を確認します。見張りの数は10。ただ、全員が銃火器を持っています。しかしそんなもの…

「私には関係ありませんってね」

糸を付けた手袋を装着し、全ての指で別々に糸を操作します。まずは相手の首に絡ませ、ちょっとしたきつく締めて頸動脈を抑えます。これで見張りは全滅ですね。念のために腕などを全てしばっておき、銃火器も回収します。

さて、これから先はスピード勝負です。倉庫に入る前に悪刀を腹に差し込み、骨肉細工で体内に取り込みます。これで効力切れ以外の体力の心配は無くなりました。

「とがめー!!」

「やっと到着ですか、遅いですよ姉さん。というか試合は？確か決勝でしょう？」

「そんなもの棄権して来たさ。『弟の危機に動かない姉はいない』からな？」

「ククッ、それもそうですね」

「さて、話はこの辺にして、そろそろ行くか？」

「あ、ちょっと待ってください」

再び記憶巡りを発動。倉庫自体の記録を読み取って…

「姉さん、中にISが一機います。そちらをお願いしてもいいですか？」

「わかった。ちなみに今は…？」

「忍法記憶巡り。無生物の持つ記録を読み取る技です」

「なら、残りの敵の人数と一夏の居場所はわかるんだな？」

「もちろん。そちらは私が対応しますよ」

「了解した。では…」

姉さんがIS『暮桜』を展開、その手には既に近接ブレード『雪片』が握られ、それを大上段に構えています。どうやらシャッターを切り裂くつもりの方ですね。とりあえず突入は姉さんに任せましょ

う。

「行くぞー!!」

姉さんがシャッターを切り裂くと同時に中に突入、音の反響やそのほかの要素から誘拐犯たちの正確な位置を割り出します。こちらに向かってくる機械音……これは無視ですね、姉さんに任せます。何せISですし。

こちらに向けて7人程がすでに銃を向けていますね。とりあえず物騒なものは落としてもらいましょう。
ワイヤーを操り、誘拐犯を全て拘束したうえで…

「虚刀流最終奥義・七花八裂応用編」

本来なら一人に7つの奥義を全て放つ最終奥義ですが、これは最大で7人までに分けて打ち込むことができます。これでとりあえず七人撃破。さて、ここからはいつもより強めで行かせてもらいますよ？さすがに殺しはしませんが、内臓などはいくつかつぶされても文句は言わせません。

「おとなしくやられてくださいね？」

あの後私は残りの人員を片付け、姉さんの戦闘を手伝っていたのですが、相手のISには逃げられました。
確か第二世代型の『アラクネ』でしたっけ？足が八本もあったので

すべてワイヤーで拘束しようと思ったのですが、何と足を切り離して爆発させてきたんです。爆発による衝撃に乗ったのか、次の瞬間にはどこかへ逃げていきました。

一夏は無事でした。どうやら異常も見つからないようなので一安心です。一夏にはなぜあの倉庫に私が来ていたのか聞かれましたが、『一夏を助けに来た』とだけ伝えて後ははぐらかしました。なんであつて？そりゃ、言つて一夏に拒絶されたくないからですよ。拒絶されたらこれから先生きていける気がしませんし。

どうやら姉さんに情報提供したのはドイツの軍らしく、対価としてドイツ軍の指導を1年間することになったようです。今はその見送りに来ています。

「では、行ってくる。とがめはもちろん、一夏も風邪や怪我などには気を付けるよ？後一夏、とがめには絶対に無理はさせるなよ？」

「わかつてるって千冬姉。それよりもさ…」

「ん、どうした？」

「はいこれ。プレゼント」

「何？」

突然一夏が言い出したんですよ。しばらく会えなくなると伝えたら、「じゃあプレゼントあげようぜ」と。ちなみに中身は私と姉さん、一夏の三人で写った写真です。姉さんだけニコリともしいていませんが。

「これは…」

「それと、さっきの注意はそのまま千冬姉に返すよ」

「姉さんもお元気で」

「ああ、気を付けるとしよう。では、とがめ、一夏。行ってきます」

「「行ってらっしゃい！」」

第3話（後書き）

いかがでしたか？よろしければ感想・誤字報告などをお待ちしております。罵倒のみなど悪質なものは即刻削除いたしますのでご了承ください。

第4話（前書き）

相変わらずの駄文です。それでもよろしければどうぞ。
今回ちよつと短いです。

初の3人称。難しい…

そして戦闘描写はやっぱり苦手。

まさかの日刊ランキング62位！みなさん本当にありがとうございます！
ます！これからも駄文が続くと思いますが、この作品をよろしくお
願いします！

第4話

「とがめ姉、ちゃんと受験票とか持ってきた？忘れ物してない？テスト中に…」

「分かったから少し黙ってくれますか？今復習してるんです。それにその注意何回目ですか？一夏こそ最後の復習でもしたらどうですか？」

どうも、織斑とがめです。現在中3の受験生です。あ後は特に何か事件が起きる訳でもなく平凡に暮らしていました。ああ、鳳鈴音さんが中国に帰って行ったそうです。私が行けなかったので弾君（本人にそう呼べと言われました）に別れ際の様子を聞いたところ、何やら鈴さん（こちらにも本人に言われました）

がプロポーズまがいの事をしたらしいです。何やら「毎日味噌汁を…」という言い回しを『酢豚』に変えて言ったらいいのですが、一夏は朴念仁ですからね。果たして気づいているのでしょうか…

というか一夏に惚れる人多くありませんか？鈴さんのほかに篤ちゃん、弾君に聞いたところ他にもいるようですし。

「全く、何人泣かせれば気が済むのでしょうか…」

「ん？なんか言った？」

「いえ、何でも。ちなみに一夏、会場の地図は把握していますね？」

「おう。ただ、どうしてあそこの中はああまで入り組んでるんだろうな…」

「知りません。建てた建築家のセンスじゃないですか？」

現在私たちは受験会場に向かう電車の中にいます。私はIS学園、一夏は藍越学園というところを受験します。姉さんが私のIS学園入学を許したのは、私のIS適正が『A』だったのと、姉さん自身がIS学園で働いているそうなので（姉さんが緊急用にくれた電話番号がIS学園の物でした）私に何かあっても姉さんがすぐに来れるからということみたいです。姉さん、ドイツに行く前に正式に引退表明していたんですね。で、ドイツから帰ってきてからIS学園で教師として働いているそうです。何やら最近帰りが遅いと思ったらそういうことだったのかとやっと納得できました。ただ、それでもいい顔はしなかったんですね…まったく、少しは妹の事を信用したらどうなのでしょう？あ、ちなみに筆記は完璧ですよ？

「迷っても私に連絡つきませんか？間違っても名前を間違えるなんて馬鹿な真似はやめてくださいよ？」

「大丈夫だって！とがめ姉も心配し過ぎだ」

「ならいいのですが…」

『まもなく。。。。。。』

「一夏、おりますよ」

「あ、待ってくれよ！」

（side out）

（第三者 side）

『それでは、実技試験を始めます。双方準備はよろしいですね？』

「もちろんです」

「当たり前だ」

対峙するのは、試験官の一人であり、本来実技はやる予定ではなかったが、妹が参加するということで急きょ試験役を買って出た『世界最強』『ブリュンヒルデ』などの異名を持つ織斑千冬。

もう一人はその妹であり、転生によってすさまじいまでのチートを持つ『転生者』織斑とがめ。

『それでは…始め！！』

ここに、数年振りの姉妹対決が始まった。

とがめは刀を突きの際勢で構え、そのまま静止した。

対する千冬は、さすがに試験で先手を取るわけにもいかず、ただ刀を正眼に構えていた。

先に動いたのはとがめの乗ったISだった。

「シツツツツ！」

その動きとは些細なもので、ただその場で突きを繰り出す。しかし、

千冬は普通なら間合いには入っていない。しかし、あいにくとがめは普通ではなかった。そのありえないほどの速度で放たれた突きは、そのまま空気の刃を相手に放つ。

「ガッ!？」

謎の衝撃により、千冬は大きく吹き飛ばされた。ISのシールドエネルギーも一気に削られていく。

千冬は突然自身を襲った衝撃に混乱していた。

（今のは衝撃砲?しかし、訓練用の機体にそんなものが放てるものなど…ッ!?)

そこまで考えて、千冬はある事実に思い当る。とがめはその場で突きを繰り出していた。その直後に自分に衝撃が来たことを考えると、妹が何をしたかわかった。

（斬撃を打ち出すとは…相変わらずのバグだな。しかし…）

「いい加減連敗記録も断ちたいんでなあ!」

とがめと千冬の戦績は2勝0敗。いまだに千冬はとがめに勝てた事がないのだ。

それも、生身とISで戦つての事だが。

「私も簡単に負けるわけにはいきませんのでっ!」

とがめはそう言いながら突きを連打する。その正確な狙撃は確実に

千冬のエネルギーを削っていく。

しかし、ただやられているだけではない。

「そこっ！」

千冬は、連打の一瞬の隙を見切った。このために、突きを受け続けていたのだ。

「フッ！」

懷に潜り込んで斬りかかる千冬。しかし、そうはさせじとがめも切り返す。

一度つばぜり合いに持ち込んだ後、大きく弾き飛ばされる千冬。再び正眼に構えると、とがめも同じ構えを取っていた。

（突きが来ない…？）

先ほどまでのパターンなら、ここで再び突きの連打が来るものと踏んでいた。しかし、互いに構えたまま動かない。

「…姉さん。いい加減ケリつけないので、少々本気で行かせてもらいますよ？」

「いいだろう、かかってこいとがめ！！」

とがめはその言葉を聞き、刀を上には振り上げた。そして――

「速遅剣」

——千冬のISが機能を停止した。

速遅剣。とある小説に出てくる剣聖の技で、剣の間合いを自由自在に伸縮させる技だ。とがめはこれを、本家よりも素早く、そして威力を上げて使うことに成功していた。そんなものを喰らえばただでさえ減っていた千冬のISのシールドエネルギーが持つわけがない。

『そこまで!』

side out

とがめside

全く、姉さんは恐ろしい人です。どうやったら私の突きでの連打を見切れるのでしょうか。

『試験はこれで終わりです。お疲れ様でした』

あ、そう言えば試験でしたっけ、コレ。姉さんとの戦いがあまりに楽しかったので忘れていました。にしても本当に姉さんは規格外です。最近思い出した錆黒鍵の技を使ってみました、いくら手加減しているとはいえ、ここまでいい勝負ができるとは思ってもみませんでした。さて、一夏はどうなったのでしょうか？

「ここか？」

え？なんでここに一夏が？私には気づいてないみたいです。まさか…迷いましたか？それとも名前を間違えたのでしょうか？IS学園と藍越学園って似てますしね。ふむ…少し観察してみますか。

「これって…IS?」

あ、一夏が何やら試験用のISに気づいたみたいです。何やら恐る恐るですが…あ、触れました。

「!?!」

なぜです?なんでISが起動しているのですか?あれは男には反応しないはずですが…

「え!?!な、なんだ!?!」

おお、試験官の方々が集まってきました。まあ、イレギュラーな事態ですからねえ…

「お、おい君!な、なにをした?!って男!?!」

「おい、今すぐ検査の準備をしろ!」

「は、はい!」

やれやれ、一夏は混乱しっぱなし、ほかの試験官の方々は検査やらなんやらの準備、姉さんはどうやら休憩中のように…

「あなたは何をしてるんですか…!」

「あ!とがめ姉!ちょっと助けてくれよ!なんか電気みたいのが走ったと思ったら突然こんなことになってるし」

「あきらめてください」

「そんなぁ!？」

やれやれ、一夏がまさかこんなことになるとは…やはり束さんが関係しているのでしょうか？次会う機会があつたら姉さんと一緒に少し問い詰めてみましょうか。

家の家族はみんなどこかおかしいんですね…長女は元世界最強、次女は（自分でいうのもなんですが）

『転生者』という名の規格外、弟は世界で初めてISを起動させた男…

なんかもう運命的なものがあると思いますよね、ここまでそろつちやうと。

「さて、一夏」

「とがめ姉助けてくれんのか!？」

「いえ。ですが、これだけは聞いておこうと思ひまして」

「な、何だよ…」

「ひょっとして、IS学園と藍越学園を間違えましたか？」

「うぐ…」

「凶星ですか…」

「ああ、そうだよ！名前間違えたんだよ！」

「馬鹿ですか？まったく。ですが…」

「え？」

「これで同じ学校に行けますね。倒れたら看病お願いしますよ？」

看病してくれる人があるというのはいいものです。一夏のお粥は絶品ですしね。あれが食べられなくなるというのがIS学園に入る際の欠点でしたが、これでそれも解消されましたし。それに、また一夏が誘拐されるということがあるかもしれませんし。まあ、これで心配しなくてよくなりましたね。

今ブラコンだと思った人、私はブラコンではありませんよ？

第4話（後書き）

いかがでしたか？よろしければ感想・誤字報告などをお待ちしております。罵倒のみなど悪質なものは即刻削除いたしますのでご了承ください。

誰か俺に文才を分けてくれッ！

そうそう、ここでアンケートを取りたいと思います。
内容は…

『一夏と誰をくつつけるのか？』です。

候補は、

1、 箒

2、 鈴

3、 セシリア

4、 シャルロット

5、 ラウラ

6、 簪

7、 まさかのオリ主、とがめ

この中からお願いいたします。期限は一週間後の11月19日にさせていただけます。数字だけでもOKですので、どしどし応募してください。よろしくお願いします。

主人公設定（前書き）

初めて設定というものを書いてみました。

アンケート途中経過

1、篤・7票

2、鈴・1票

3、セシリア・0票

4、シャルロット・2票

5、ラウラ・0票

6、簪・0票

7、とがめ・6票

別で1〜6のハーレムもありましたが作者の力量的にハーレムは厳しいものがあるかと…

期限は11/19です！数字だけでも結構ですので、まだまだ応募お待ちしております！

日刊ランキング23位…ですと…！？

皆様本当にありがとうございます！これからもよろしく願いしま

す！

1
1
/
1
5
追加しました

主人公設定

名前・織斑とがめ

容姿身長体重・まんま刀語のとがめ

能力・刀語の全能力&技、曲絃師、音使い

持ち物・悪刀『鏹』、ワイヤー、鉄パイプ2本（基本は腹の中に収納）

好きな人、物・千冬、一夏、和風な物、本、一夏の作るお粥

嫌いな人、物・家族を馬鹿にする人、家族に手を出す人

内容・子どもを庇って死んだ転生者。ただし、前世の自分に関しては全くと言っていいほど覚えていない。

また、能力の代償として『鏹七実の病魔』を持っているため体力はまるでない。

しかし、見稽古を使えるためたいいの事はなんでもできる。また、能力に関しては鍛えることで本家を超えることが可能。元から強いもの（たとえば鍔黒鍵の技など）はあまり上がらないが、元がすさまじく悪かったりすると結構強化することが可能。

小中学校は保健室登校で、つねにベットで寝ていた。そのため友達と呼べる存在は少なかったが、中学校あたりから一夏が保健室に来るようになったので多少は増えた。しかし、それでも普通の人と比

べると圧倒的に少ない。

それでも前世の知識から勉強はできたため、一夏に教えることもしばしば。

沸点に関してはかなり高く、そうそう動揺したりはしない。しかし、家族に手を出すものには一気に切れる。

主人公設定（後書き）

いかがでしたか？よろしければ感想・誤字報告などをお待ちしております。罵倒のみなど悪質なものは即刻削除いたしますのでご了承ください。

にしてもアンケートでセシリアとラウラと簪の票の少なさがヤバイ……（笑）

第5話（前書き）

相変わらずの駄文です。それでもよろしければどうぞ。

アンケート途中経過

1、箒・9票

2、鈴・1票

3、セシリア・0票

4、シャルロット・2票

5、ラウラ・0票

6、簪・1票

7、とがめ・14票

箒ととがめ強いwww

正直言つてここまでとがめに票が入ると思っていませんでした。

期限は11/19の0時00分です！数字だけでも結構ですので、
まだまだ応募お待ちしております！

第5話

「皆さんご入学おめでとうございます！」

どうも、織斑とがめです。

IS学園入学初日です。先生らしき人が入ってきてあいさつしましたが、みなさん気づいていないようです。ガン無視です。先生涙目です。

まあ、そりやそうですね。何せうちのクラスには――

――世界で唯一の男性IS操縦者である一夏がいるんですから。

あの試験会場でISを起動させた後、政府に呼ばれたり、家にあちこちの研究所が押しかけてきたり（私が物理的に鎮圧しました）して、あれよあれよという間にIS学園への入学が決定。で、現在周りからの好奇の視線を受けて耐えきれなくなったのか机に突っ伏しています。なぜか机が教室最前列のだ真ん中というのもあるんです。う。

あ、私もさすがに初日から保健室はまずいだろうということ教室にいます。いったいいつ振りでしょうね、教室で授業受けるの。ちなみに私の席は一夏の真後ろです。さつきから口笛を吹いて地味に認識阻害かけ続けているので誰も私には気づいていません。気が付いた時のリアクションが楽しみです。一体いつ気が付きますかねえ……あ、自己紹介したら気づきますか。

「あ、あのツ！皆さんご入学おめでとうございます！――」

『は、はい――』

おお、皆さん今の今まで先生が気が付いていなかったとはいえビツクリし過ぎです。耳がキーンとします…

「えっと、このたびこの1年1組の副担任となりました、山田真耶です！これから1年間よろしくお願いします」

副担任ですか？担任はどなたなのでしょう…ハッ！まさか姉さん！？いや、でもISS学園も一応普通の高校と同じぐらいのクラス数はあるし、その分先生もいるはずですから、確率は低いと思います
が…

『よろしく願いします』

「それではみなさん、出席番号順で自己紹介してください」

ふむ、自己紹介ですか。いつ振りですかね？ここ3年はやった記憶がないので、ちゃんとできるか心配ですが…

「ええと、次は織斑一夏君お願いします！」

お、次は一夏ですか。少々参考にさせてもらおうとしましょう。

「……………」

「お、織斑君？」

「……………」

「織斑君……！」

「は、はい!？」

一夏、驚き過ぎですよ。先生がやっと回復したと思ったたらまたすぐ涙目じゃないですか。一体どうしてくれるんですか。

「え、えっと、今は自己紹介をやっていて次は織斑くんなので、自己紹介してくれませんか…?」

「は、はあ。えっと、織斑一夏です」

そこからどうするつもりでしょうか。おそらく先ほどの方々の説明を聞いている限り後2、3は話した方がいいと思います。

「……(汗)」

あゝ、これは混乱してますね。私には気づいていないはずですから当然助けは求められません。何やらポニーテールの方に助けを求めるような視線を送っていますが…ああ、箒ちゃんですか。どうやら久々に会った幼馴染にSOSを出しているようです。あ、目をそらされました。なんか苦悶の表情を浮かべていますが…

「…以上です!」

あ、馬鹿ですね。あまりにはっきり言いすぎたため、まるで新喜劇のようなアクションをしてしまった方が数名います。芸人魂ですか？

あ、誰か後ろで出席簿振り上げてる…って姉さん!? 本当に担任だったんですか!?

「ちゃんと挨拶ぐらいしろ馬鹿者」

バゴン！！と、頭から絶対に出てはいけないような音がたちました。あの出席簿どれだけ威力が高いのでしょうか。あれは向かってきたら糸で切断するのでしょうか。

「そしてお前もさっきからその耳障りな口笛をやめろ」

「おおう！？」

危ない危ない、さっきの一夏に対する注意から警戒していなければ当たっていましたよ？まったく、こんなところで無駄に技術使わせないでくださいよ。

「突然どうしたんですか、姉さん？」

「ここでは織斑先生と呼べ、馬鹿者。それと出席簿切断するんじゃない。弁償させるぞ」

「あ、弁償は勘弁してください。そしてあなたは病弱な私に黙って叩かれるというんですか？」

そうそう、姉さんがなぜ私の音を聞いたうえで反応できるかといいますと…

この人、音による操作が一切効かないんですよ。

ええ、前々からうすうすそうだろうな」とか思ってたりましたよ？私の修業も知ってたみたいですし。一応、音による操作で朝まで絶対に起きない様に細工したりしたんですよ？なのにこの人、「こんな夜中にどこへ行く？」とか言つて玄関から出ようとしているところに声をかけてくるんです。思わず飛び上がったやいましたよ。で、それからもちよくちよく同じことを繰り返し、もうちよつと眠りを深くしてみよう、とかいろいろ試したのですが防げませんでした。それを10回ぐらい繰り返したところで、ああ、この人は効かない体質なんだなとあきらめました。

「つて千冬姉！？それにとがめ姉も！」

「あ、やつと気が付きました？全く、姉に気が付かないとは……」

一夏が私に気づきました。周りの人たちも私が突然現れたように見えて驚いてますね。音で操作していたので気が付かないのは当たり前（むしろ姉さんが希少種）なので一夏や周りの人たちに非はないんですが。

「あ、いや……」

「そして今は織斑先生と呼べ馬鹿物」

「ガッ!!」

はい、二発目入りました。なんかこのままやってたらはげそうですね……

「さて、すまなかったな、山田先生。そして貴様ら、私がこのクラスの担任の織斑千冬だ。私の役目は15歳を16歳に育て、使える

ようにするのが私の仕事だ」

完全軍隊方式ですね。いまだにドイツの軍の指導のノリでやっているのでしょうか？

『キヤ———！！！！』

「があ！？」

またまたうるさいですよみなさん！！私は音には人一倍敏感だから余計つらいんですよ！

「本物の千冬様よー！」

「私ずっとファンでした！サインください！」

「かつこいいー！」

「さっきの『千冬姉』って、まさか織斑君千冬様の兄弟…？」

「いいなあ、かわって欲しいなあ」

ああ、そういえば姉さんは有名人でしたもんね、ならこの反応は納得です。にしても、同性に人気ありすぎじゃないですかね？そして最後の人。あの人の妹は結構大変ですよ？

「はあ…毎年毎年よく馬鹿者どもが集まるな…狙っているのか？」

あ、姉さん、このタイミングでのその発言は地雷です。おそらくこのクラスなら…

「もっと調子に乗らないようにいたぶってください！」

「ああん、もっと罵ってくださいい！」

ほら、やっぱりMの巣窟でした。というよりもただノリがいいだけなんでしょうか…？

「して、お前は満足に挨拶もできんのか？」

「いや、だって…」

「だってもくそもあるか。織斑姉、手本を見せてやれ」

「え？私ですか？」

まさかの飛び火です。

「ちょうど出席番号の次はお前だ。さつさとやれ」

「はあ…えっと、織斑とがめです。先ほど紹介した織斑一夏の双子の姉です。趣味は読書・音楽。体が弱くてみなさんに迷惑をかけることもあると思いますが、これから1年間よろしくお願いします」

「え、てことは千冬様の妹…？」

「いいなあ、代わってくれないかなあ」

いや、だからあの人の妹は大変なんですって。まあだからと言ってあの姉さんに拾われたことを後悔はしませんけどね。

そして残りの人の自己紹介はさっさと終わり、現在は休み時間。

「大変ですね、一夏」

「そう思うならどうにかしてくれよ」

「あの…」

「いえ、結構面白そうなので却下です」

「ちよっとうちの姉はどうしてここまで厳しいんだ!？」

厳しい?何を言っているんですか。弟をいじるのは当たり前でしょう?」

「いや当たり前じゃねえから!」

「あれ、なんで私の考えてることが分かったんですか?」

「いやダダ漏れだよ!」

「あの!」

「「え(はい)?」」

突然大声出してどうしたのでしょうか。

「ちよっと…いいか?」

あら、箒ちゃんじゃないですか。あ、そういえばこの子も一夏の事が好きでしたね。なら私は邪魔になりそうです。とっとと逃げておきましょう。

「では二人とも、ごゆっくり」

「お、おう」

「あ！とがめ！？」

なんか箒ちゃんが慌てて私の事を呼んでいます。おそらく一夏と二人きりというのが気恥ずかしいのでしょう。ですが、知ったことじゃありません。とりあえず二人でゆっくり話をさせてあげましょう。何せ6年振りの再開ですし、積もる話もあるでしょうから。

あ、あとで一夏が惚れさせた人のことぐらいは教えてあげたほうがいいですかね？

第5話（後書き）

いかがでしたか？よろしければ感想・誤字報告などをお待ちしております。罵倒のみなど悪質なものは即刻削除いたしますのでご了承ください。

次の投稿は速くて1週間後、遅くて2週間後ぐらいかと…

あ、アンケート結果だけ別で投稿します。

アンケート結果

さてさて、アンケート結果発表と行きたいところですが、その前に少し。

PV5万、ユニーク1万、お気に入り登録200突破いたしました！みなさん、こんな駄作を読んでくださり本当にありがとうございます！これからもよろしくお願いいたします！

さあ、それではアンケート結果発表です！

1位、とがめ・15票

2位、箒・11票

3位、シャルロット・2票

4位、簪・1票

同率4位、鈴・1票

5位、セシリア・0票

6位、ラウラ・0票

というわけでヒロインはオリ主・織斑とがめに決定です！みなさん20票以上の投票ありがとうございました！

なかなか人気だった箒も気が向いたら番外編か何かで書くかも…

?

第6話（前書き）

テスト週間中にも関わらず投稿。

相変わらずの駄文です。それでもよろしければどうぞ。

週間ユニークアクセスでISの検索かけて1ページ目に載るとか、
プレッシャーが…！！

第6話

どうも、織斑とがめです。

現在山田先生によるISの基礎理論の授業中なのですが…

「……（プシュ）」

目の前で一夏が撃沈しています。どうやらわからないみたいですが、なんとなく面白そうな予感がするので放置します。にしても、このぐらい前にもらった参考書さえあれば余裕なんですがね…

「えっと、誰かここまでで質問のある方はいますか？」

さあ、一夏！聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥です！さっさと聞いてしまいなさい！なんか面白そうですし！

「は、はい…」

おお、念が通じたのかどうかわかりませんが一夏が手をあげました。さてさて、なにを言い出すのやら…

「はい、何処がわからないんですか？」

「えっと…全部です」

は！？

「馬鹿者が」

「ぎゃッッ！」

うん、今のは一夏がいけない。というか…

（「参考書はどうした？」って姉さんも同じこと考えてましたか。

「あの、参考書って…？」

「あの分厚い奴ですが…」

ちょっと助け船を出してみるとしましょう。

「あ！ひょっとして…」

「どうしたのです？」

「古い電話帳と間違えて捨てたかも、それ」

あ、姉さんの後ろに修羅が見えます。

「馬鹿者」

「がつー！」

IS学園に入ってから一夏の頭がはげないかちょっと本気で心配してます。おもに姉さんの出席簿で。

「まったく、必読と書いてあっただろうが」

「うっ、すみません…」

「まあ捨てたのなら仕方がない。再発行してやるから、一週間で全て覚える」

「んなむ「返事は『はい』だ。それ以外は認めん」は、はい…」

一夏、ご愁傷様です。さすがにあれを一週間はきついのでは…ま、本人から頼まれない限り手伝いはしませんが。だってそのほうが面白いですし。

「さて、それでは山田先生。授業を続けてください」

「あ、はい！えっと…」

「……（プシュ）」

現在、休み時間です。リアルで頭から湯気出てる人って初めて見ましたよ。そしてデジャヴです……ちょっと声かけてみましょうか。

「大丈夫ですか？」

「これが大丈夫に見えるのか？」

「いえ、まったく。まるで漫画みたいだなとは思いましたが」

「何だよ、他人事だからって…そうだ！とがめ姉、ISの勉強教えてくれないか？」

「いいですけど…」

ええ、私が手伝わないのは本人から言い出さなかった場合ですから、この場合はもちろん手伝いますよ。

「ちよつとよろしくて？」

「「なんだ（はい）？」」

何でしょうかこの人。人が話している最中は話しかけないという最低限のマナーさえ知らないのでしょうか？

「まあ！何なんですかその態度！人がせっかく話しかけて差し上げてるのに！」

あ、ちよつとプツンしそうです。思わずワイヤーで頸動脈押さえつけて気絶させたい衝動に駆られますが、我慢です。ここでそんな高等テク（というよりはたから見たら化け物）を使ったら後処理が面倒ではないですか。むしろここはこの人で遊ぶとしましょう。ええ、そうしましょう。それでどんなとばっちりが一夏に行こうと関係ありませんし。

「ごめん、俺君が誰だか知らないし」「私も右に同じくです。そもそもマナーを守らない人には興味がありません」

ちよつと一夏にかぶせるつもりで言ってみましたが、顔真っ赤です。相当頭に来てるんでしょうね…

まあ、いい気味ですが。

「こ、このイギリス代表候補生にして入試主席のセシリア・オルコ

ットを知らないですって!？」

あ、主席だったんですか。それにイギリス代表候補性…だからどうしたんでしょうか？

ああ、この反応は心の中にとどめておかなくてははいけませんね。『代表候補生』なんて言って驚かないのも姉さんの存在があるからですし、何より私が『生身』でISに圧勝できるなんて一番知られては生きないことですから。一夏すら知らないんですし。

ここは、一夏の反応を待つとしましょう。

「代表候補生って…何？」

あ、馬鹿やらかした。

「なっ……代表候補生を知らないんですの!？」

ええ、それが普通の反応ですよ。私だって赤の他人からそんな発言が出たら驚きます。

「おう、知らん」

ちよつと一夏を助けるとしましょう。一夏が馬鹿なせいで私まで馬鹿にされるのは気に食いませんからね。まあ、一夏に対してもあまりに過度な場合は速攻で鉄拳制裁ですが。ためらいなどありません。

「一夏、代表候補生っていうはその国の代表の候補生、つまりは将来的に国を背負うことになるかも知れないIS操縦者の事です。確か倍率はなかなか高いんですよ？」

「そう、私はエリートなのですわ！そんな私に声をかけてもらえて
いるんです、ありがたいでしょう？」

「「そうか、それはラッキーだ（です）」」（棒読み）

「あ、あなた馬鹿にしているんですの！？」

「いえ、馬鹿になどしていません。遊んでいるんです」

あ、おもわず本音が。

「なッッ！！」

と、ここで授業開始のチャイム。とりあえず顔真つ赤にしたまま「
覚えていなさい！」などと小物臭のぶんぶんするセリフを残して去
っていきました。あ、いくら小物でもおそらく人の話に割り込んだ
りしないでしょうから、小物以下ですか。

「さて、この時間は実戦に使用する装備の特性について説明するん
だが…その前にクラス代表を決めないとな。他薦自薦構わんから、
手を上げて発言しろ」

「織斑君がいいと思います！」

「私も！」

おお、一夏大人気ですね。皆さんおそらく物珍しさから来てるんで
しょうが…いや、この天然一級フラグ

建築士はすでに落としてる危険性も…ないですね。考えたら私の前から一夏が消えたのはトイレに行った一回だけでした。さすがにそれではフラグは建てられないでしょうし

「ふむ、それではクラス代表は織斑弟で異存は無いな？」

「…って俺！？」

一夏、反応が今更すぎます。

「ちょっと待って、俺そんなの無理だし」

「自薦他薦構わないと言ったはずだ。ちなみに推薦は取り消せないからな」

「マジかよ…！！だったら俺はとがめ姉を推薦します！」

「私ですか！？」

思わぬ伏兵です！こうなったら私がどれだけ体が弱いかにアピールして…

「納得がいきませんわ！」

あ、またこの人ですか。いい加減切れてもいいですか。

「どうせみなさん物珍しさからの推薦でしょう！？そんな選出認められませんわ！そもそも――」

――であるからして、大体こんな野蛮な後進国にいて
自分が私にとっては苦痛なんです！その上に野蛮人の男が代表？ふ
ざけないで――」

「お前そんなこと言ってるけど、イギリスだって世界一まずい料理
何年覇者だよ」

「なっ！！わっ、私の祖国を侮辱するといつのですか！？許しませ
んわ！」

「そもそもケンカ売ってきたのはそっちだろうが」

「ッ！！この野蛮――」

「少し黙れ、ただの雑魚が」

もついい加減切れてもいいですよ？

「ただの…雑魚、ですって…！！！！」

「ああ、お前の事だよ。理解できなかったか？」

「ふん！！弟も弟なら姉も姉ですわね！」

「うるさい、そんなに自分が弱いことを認めるのが嫌か？」

「いいですわ、決闘です！姉弟そろって叩きのめして差し上げますわ！」

「叩きなおされるのはお前だ、クソガキ」

「そこまでだ、いい加減席に着け」

姉さんの指示なら仕方ありません、どうせだったら頸動脈あたりに糸結びつけて脅してもよかったんですが…

「さて、それでは話はまとまったな。今週末、第3アリーナでクラス代表決定戦を行う。第一試合はオルコットと織斑弟、2戦目はオルコットと織斑姉、3戦目は織斑姉弟だ。異論はないな？」

「先生、質問です！なんで織斑君だけ間が空くんですか？」

「間に休憩はとらせる、不平等にはしない」

さて、決闘になっちゃいましたね…まったく、私も戦わなくてはいいなくなっただけありませんか。姉さんに本気は出すと言われるのに…

でも、それ以前に一夏ですね。おそらく現状のままなら手も足も出ずに負けるでしょうし…

あ、箒ちゃんでも呼んで剣道を鍛え直して貰いましょうか。3年間も剣から離れていると鈍りも凄いでしょから、そのところを重点的に。私が鍛えてもいいんですが、体力的な問題がありますからね。

第6話（後書き）

いかがでしたか？よろしければ感想・誤字報告などをお待ちしております。罵倒のみなど悪質なものは即刻削除いたしますのでご了承ください。

さて、次回とは言いませんがもうすぐヒロインアンケートでまさかの0票だったちよろいさん戦。

どんな戦いにしましょうかね…

第7話（前書き）

相変わらずの駄文&ぐだぐだです。それでもよろしければどうぞ。

全然話が進んでくれない…（泣）

第7話

どうも、織斑とがめです。

現在放課後となりました。IS学園は全寮制なので、これからは寮で暮らすこととなります。

果たして誰が私のルームメイトなんでしょうか…

あ、ちなみに部屋番号は1205です。

ちょっとシャワーを浴びてくるとしましょうか。流したいものもありますし。

流したいものとは何か、ですか？そうですね…

私は今まで学校という物にまともに参加できたことはありません。なぜなら、体力が持たないからです。さすがに式関係は参加するようになっていましたが、その後倒れて保健室に運ばれるのが常でした。ではなぜ今回は倒れていないのか？答えは簡単です。

「真庭忍法・骨肉細工」

骨肉細工で体から取り出したのは『悪刀・鏢』です。これが今日私が全ての授業に参加できた理由。この刀は刺している間、使用者の体を生かし続けます。今日の授業中はこれを体に刺していました。こんな裏技でも使用しないと体力が持たないんですよ。実は地味に入学試験の時もこれを刺していました。じゃないと姉さんと張り合えませんかからね。

ただこれ、いくら死なないとはいえ、刺した瞬間と抜いた瞬間に血は出るんですよ。だから、今回のシャワーはそれを流すためです。

「――」

む？誰か来たようですね。さっさと胸の傷を塞いで挨拶をしなくては…

悪刀を抜いて腹の中に収納、胸の傷を骨肉細工で塞ぎます。

おそらく、というよりも間違いない女の方でしょうからバスタオルを巻く程度で大丈夫でしょう。

「初めまして。こんな恰好ですみません。このたびルームメイトとなりました…」

私はそこで挨拶をやめました。だって、そこにいたのは…

一夏だったのですから。

side out

一夏side

それは少し前の事。

「さて、帰るか」

うん、今日はいろいろときつかった。6年ぶりに幼馴染の筈にあつたと思つたら千冬姉が教師なんてやってるし、突然後ろにとがめ姉が現れるし。あの時姉さんが言つてた口笛ってなんなんだろう？そんなもの聞こえなかったんだけどな…

その後もなんか侮辱されるわとがめ姉がキレるわいろいろと大変だったし。さっさと帰って疲れを癒すしよう。

「あ、よかったまだいました！織斑君！」

「はい？」

なんか突然山田先生が走ってきた。いったいどうしたんだろう。とりあえず激しい呼吸で揺れてる巨乳…眼福です。

「えっと、織斑君の寮の部屋が決まりました！」

「え？俺って1週間ぐらい実家から通いじゃなかったんですか？」

「お前、家にいた時に何があったのか忘れたのか？」

「うおっ、千冬姉！？」

突然千冬姉が現れた。ホントこの人いつ就職してたんだろうか…

「家にいた時って…あれか」

うん、たぶんあれだ。

俺がISを操縦できるとわかった時、いろんなところの研究所やらなんやらが家に押しかけてきた。なんかずつとうちの前に陣取って動かなかったんだが、とがめ姉の一喝で蜘蛛の子散らすように逃げた。 (ちなみにとがめはこの時音による心身掌握を使用)

「今は織斑先生と呼べ。おそらくお前が思っているもので当たりだ。どうせとがめがどうにかしたんだろうが、それでもお前の事を調べようとする研究所は多い。そのため、今日からお前は入寮することになる」

「ちなみに部屋の都合上一人部屋にはできませんでした…あ、コレ部屋の鍵です」

「え、ちょっと待ってください。俺そんなこと聞いてないから荷物なんて持ってきてないんですが？」

「安心しろ、私がとがめに言って持ってきてもらった。携帯の充電器と日用品があればいいだろう」

な、なんて潤いのない…ハッ！そうだ、とがめ姉なら俺の気持ちを汲んで…！

「ああ、ちなみにとがめには余計なものは持ってこないように言うてあるからな」

orz…

「それでは、道草なんて食べてないでちゃんと部屋に行ってくださいね」

いや、道草は食べられるものじゃないだろう…

仕方なく俺は寮に向けて歩き出した。

「お邪魔します…」

寮の部屋に到着。覗いてみたが誰もいなかった。おそらくどこかに出かけてるんだろう。

にしてもさすがES学園。設備が豪華だ。ベットなんて超ふかふかだし、部屋の内装もきれいだ。

と、この部屋の素晴らしさを考えていた俺に、突然声がかかった。

「初めまして。こんな恰好ですみません。このたびルームメイトとなりました…」

声のした方を見れば何やらバスタオルを体に巻いたとがめ姉が出てくるところだった。ってかとがめ姉！？

とがめ姉の身長はあんまり高くないけど、胸は大きいし、肌なんて雪みたいに真っ白だし（まあほとんど家から出ないのもあるかも知れないけど）、十分美人だと思う。しかし、ここで混乱する俺ではない。

なぜなら、千冬姉もとがめ姉も、家では風呂上りは下着だけというのがデフォだからだ！

いい加減俺も慣れた。というよりもまずうちの姉二人はいくら家族相手とはいえもっと羞恥心を持つべきだと俺は思う。今では誰も気にしなくなったがとがめ姉に関しては血つながってないんだし。

ま、とがめ姉の場合は俺が千冬姉に見つかって速攻で服を着せられるんだけどな。だってこの人体が異常に弱いし、風邪なんて引かれたらいやだ。

「で、なんでこんなところに一夏が？まさか同室なんですか？」

「いや、どうやらそのまさからしいぜ？ほれ」

そう言つてとがめ姉に部屋の鍵を見せたら納得してくれたらしい。何やら「姉さんは…」とかなんとかつぶやいてるけど小さくてよく聞こえない。

「まあ、そういうわけだから改めてこれからよろしくな、とがめ姉」

「ええ、こちらこそよろしく」

＼side out＼

＼とがめside＼

驚きましたよ、一夏が同室だなんて。おそらくは姉さんの仕業でしょうね…

私の体が弱いのを心配してこうしたのでしょうか。にしても職権乱用な気がしないでもないんですがね…

あ、そうだせつかく同室になったのですからいろいろと教えてあげましょう。

「一夏、せつかくですか今からIS関連の授業でもやりますか？報酬はお粥でいいです」

「いや、教えてくれるのはいいけど報酬とるのかよ！しかもお粥！

「？」

「いいからさつさと答えなさい、やるんですか、やらないんですか？さつさと返答しないと…」

「あ、やるよ、やるから！お願いしますからあれだけはやめて！」

一夏は脅すのも簡単だからいいですねえ…え？脅したネタ？簡単です、姉さんのところに駆け込んで家にある一夏の夜の教材の場所を教えるだけです。一夏も思春期男子、そういつた欲は一丁前にあるようで、自分の部屋のさまざまなところに隠していました。まさかと思うような隠し場所もいくつかありましたが、私に対しては無意味なのです。

ちなみにこれ、既に数回実行されています。一夏はその度に泣きそうになってましたねえ。

「ならいいです、一夏、現状どこまでISに関して理解していますか？」

「えっと…できればはじめの方からがいいかなあ…なんて思ったり」

あ、そうでしたこの人まったく勉強してないんですね。全く、参考書を捨てるとは…

「わかりました、お粥（1週間分）で手を打ちましょう」

「なんか報酬が増えた！？」

「当たり前です、私がやらなければならぬことが増えるたびにお

粥の量は増えていきますのでそのつもりで。あ、ちなみに夜だけでいいですよ?」

さすがに朝早く起きて作れなんてことは言いません。

「あ、それなら何とかなるかも」

「よろしい、交渉成立です。では、まずノートなどを準備してください。私は姉さんと同じでスパルタで行きますからね?」

ふふ、みっちり仕込んであげますよ?

第7話（後書き）

というわけで箸の風呂上りイベントは消失。ルームメイトは自分の義姉。これによって自動的に味の無いチャーハンも消失。いったいどうやって箸の料理を上達させよう…？

いかがでしたか？よろしければ感想・誤字報告などをお待ちしております。罵倒のみなど悪質なものは即刻削除いたしますのでご了承ください。

第8話（前書き）

相変わらずの駄文＆ggggggです。それでもよろしければどうぞ。

第8話

どうも、織斑とがめです。

あれから1週間立ちました。今日は決闘の日です。

時間が飛び過ぎ？仕方ないじゃないですか。箒ちゃんとの剣道の練習は見学しかできず（レベルが違い過ぎて手加減が難しい、私の物は『剣道』ではなく『剣術』であるなどの理由）、せいぜいできたことと言えば一夏にISの基礎知識を叩き込む程度です。

さて、私は現在アリーナの観客席にいます。そして1戦目がもうすぐ始まるはず…なのですが。

「出てきませんね…」

一夏が出てこないんですね。確か専用機が来るとか言っていましたからそのことで時間がかかっているのでしょうか？

何やら昨日の夜になってから突然一夏が「ISの練習してない！」とか言い出した時は思わず一夏の顔にお粥吹きかけてしまいました。まさかISに乗っていなかったとは思いませんでした。まあ、かくいう私もISに乗るところかくに練習していないのですがね。

お、やっと出てきました。開始時間ギリギリで出てきた一夏の機体は――

――『白』一色でした。

Side out

く一夏side)

ようやくやってきた俺の専用機『白式』に乗って俺はアリーナへと飛び出した。

時間ぎりぎりに送られてきたこの機体は、まだ一次移行すら終わっていない。それは、まだ完全に俺の専用機にはなっていないってことだ。でも、だからって負けた言い訳にはできない。

「あら、逃げずに来ましたのね」

「当たり前だ、逃げれるわけがない。そもそも、はなから逃げようなんて思っていないしな」

ISのハイパーセンサーを利用して、観客席のとがめ姉を探す。どうせあの人の事だから寝てるだろうと思ったら、今回はどうやら試合を見に来ると言っていた。小学校時代に剣道の大会に出てもいつもその体の弱さが原因で観戦しに来なかったとがめ姉。やっと俺の戦いを見てもらえる。そう思うと、自然と顔がほころぶ。

「何を笑っていらっしゃるのかしら？」

「いや、今回はちよつとな」

「ふん、まあいいですわ。そして、これが最後通告ですわ。降参します？それともこの大勢の観客の前で無様に私にやられますの？」

「いや、俺はどっちもやらないさ。負けるのはあんだだ、セシリア・オルコット」

『警告、敵ISからのロック確認、アサルトライフルのセーフティ

ロック解除』

「なら、ここでお別れですわね！」

試合開始のブザーとともに放たれるセシリアのIS『ブルー・ティアーズ』の主武装から放たれるレーザーをぎりぎりで避けた。この辺は筭との特訓が効いている。あれやってなきゃ今頃蜂の巣だから。ますます筭には感謝だ。

「ふん、まぐれで避けたからっていい気にならないことですわ！」

次々と俺を狙って銃撃が迫る。やはり相手の方が何枚も上なのか、ちよつとづつ被弾してしまう。

「しぶといですわね…」

「はっ、負けるわけにはいかないんでな」

「なら、存分に舞っていただくだけですわ！！わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！！」

「俺はもつとアップテンポの方が好きなんでなあ！」

さらにセシリアから放たれた自立機動兵器『ブルー・ティアーズ』——通称『ビット』——からの射撃が合わさり、『白式』のシールドエネルギーをガリガリと削られていく。

（くそッ、これじゃ負ける…！なんかないのか！？）

そう思った俺は白式の装備一覧を確認——そこで思わず叫んでしまった。

「装備が近接ブレード1本ってどういうことだよ!」

そう、装備欄には「近接ブレード」1本のみ。どうあがこうがこれ以外の武器はこの白式には搭載されていないのだ。これはひょっとして…詰んだか？

「ええい、ままよ!」

とりあえず近接ブレードを展開する。何もないよきやました。

「あら、私相手に近接ブレード1本とは…あきらめましたの?」

だよなあ、そんなことを思われても仕方がない。だけど、あきらめる訳にはいかない。

「姉二人の前で無様に負けるわけにもいかないんでな!」

何とか打開策を見つけ出してやる!

——それから20数分。俺はようやく打開策を見つけることに成功した。

「見つけた…!」

「ふん、今更何をしようともう手遅れですわ!さっさと落ちなさい!」

まずはオルコット自身の放つレーザーを避ける。そして――

俺の死角に入りこんでくるビットを切り裂く！

「なっ――！」

「お前はこいつを必ず俺の死角にもぐりこませてくる。確かにいくらISのハイパーセンサーがあろうと、死角に入られちゃどうしても対処が遅れる。だけど、お前がこいつをもぐりこませてくる場所がわかっていれば、対処なんてたやすいんだよ！」

言いながらオルコットの撃ってくるレーザーをかわし、動いていないビットをもう一機切り落とす。

残り――2機

「言つとくと、お前、自分が動いているときはビットを動かさせてないだろ」

「ッ――！」

動揺した瞬間を狙って残りのビットを斬り落とす。

「さあ、仕切り直した！今度はロックでも踊ってもらうぜ、セシリア・オルコット――！」

side out

ビットside

そのころ、ビット内では――

「あの馬鹿、調子に乗っているな」

姉に完全に心境を見抜かれていた。

「え、どうしてわかるんですか？」

山田真耶の疑問も当然。実際、一夏の言動からはやる気は感じられるものの、調子に乗っているとは思えない。

「ああ、あいつの左手をよく見てみる」

「手…ですか？」

「あ、開いたり閉じたりしている…？」

筭の言う通り、開いたり閉じたりを繰り返している。しかし、そこからどうして調子に乗っているなどということがわかるのだろうか。

「そうだ。あいつがあれをやっているとき、大抵は何かミスを起こす」

「ほえ、よく見てるんですね。弟さんの事」

「当たり前だ、姉弟だからな。おそらくとがめでもこのぐらいわかるだろうさ」

「あ、ひょっとして照れてたりします？」

「……山田先生、私は家族の事でからかわれるのは嫌いだ」

「わ、わかりました！あ、ほら！もうすぐ決着つきそうですよ！」

言われてアリーナの映像に目を戻せば、ちょうど一夏がセシリアに斬りかかる場所だった。

しかし…

『残念ですわね！ブルーティアーズは6機ありましてよ！』

その言葉とともにセシリアのISのスカート部分から放たれる弾道ミサイル。

それを一夏はもろに喰らってしまった。

「一夏！」

煙に包まれる白式。しかし――

「ふん、機体に救われたな、馬鹿者が」

――そこにいたのは、純粋な穢れひとつない『白』だった。

＼side out＼

＼一夏side＼

『一次移行が完了しました、確認ボタンを押してください』

何やら突然俺の前に出てきたウィンドウのボタンを押した途端、世界が変わった。

さつきよりも角やなんかが取れて、西洋の甲冑を思わせる流線型のIS。

そして、手には近接ブレード——名称『雪片式型』——が握られていた。

「なッ！？一次移行！？あなた、今まで初期設定の期待で戦ってたっていいのですか！？」

オルコットがなんか言っているが、そんなもの俺の耳には入らない。

IS用近接ブレード『雪片』

世界最強であり、俺が憧れる人の使っていた刀。今、俺の手にはそれとよく似た刀が握られている。

「ハハッ、なるほど。俺は、世界で一番の姉、いや、姉さんたちを持ったよ」

それにもう一人。今日は姉二人がそろって見に来てるんだ。そんなところで無様に負けるわけにはいかないじゃないか。

「は？あなた一体何を——」

「だから、とりあえず俺は千冬姉やとがめ姉の名前を守るさ」

「ああもつ、わけがわかりませんわ！」

「別にわかんなくなたって構わないさ。さて、ここからは今度こそ1対1だ。いい加減終わりにしようぜ！」

「ふん、それはこちらのセリフですわ！」

もうあいつにビットやなんかは存在しない。となれば銃口は一つしかないんだ、かわすことなんて簡単だ。オルコットの銃撃をかくぐって、一気に雪片式型の間合いに入る。先ほどまでよりも圧倒的にスムーズな動きによっていとも簡単に接近することに成功した。

そしてオルコットのライフル『スターライト』を上へ大きく弾き、雪片式型を大上段に構える。

「これで終わりだアアア！」

そして、その白い刀身がオルコットのISを切り裂こうとしたとき――ブザーが鳴った。

『試合終了。勝者、セシリア・オルコット！』

「「は？」」

その時、俺はすごく間抜けな顔をしていたと思う。

第8話（後書き）

一夏VSセシリア終了。次はとがめVSセシリアです。そしてその次は織斑姉弟対決となります。

いかがでしたか？よろしければ感想・誤字報告などをお待ちしております。罵倒のみなど悪質なものは即刻削除いたしますのでご了承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1832y/>

ISに生まれた奇策士

2011年11月27日15時54分発行